

その1 着る

コンパクトに畳めて持ち運べる上着
スイッチひとつで終わる洗濯から乾燥
化学繊維で作られた服はシワ知らず

そんな魔法のような現代から
ほんの少し時計の針を戻したら……

あのころの道具たちに
そんな便利さはないけれど
私たちには大切にしていたことがありました

展示資料

資料名	説明
引回合羽	襟がなく、裾が広い合羽のことです。 寒い時期に外出するときに着ていました。 ２枚の木綿絣の布地の間に、古文書を挟みこんだ生地で仕立てられています。 木綿絣とは、綿糸を藍染めなどで染め分け、かすれた模様を織り出した伝統的な綿織物のこと。温かみのある肌触りと丈夫さが特徴で、日常着として親しまれていました。
とんび	寒さや雨を防ぐために着ていました。 フェルトで仕立てられています。 着物の上からでも着やすいように、袖を通す穴が大きくなっています。 手を広げたときの姿が、鳥の「とんび」に似ていることから、「とんび」と名付けられました。
ござ帽子	雨や雪が降っているときに着ていました。 植物のイグサを編んで作ります。 頭巾のように頭から被り、頭と体を覆います。雨風を遮り、雪は滑り落ちるつくりです。 イグサとは、畳やござの原料となる多年草で、湿地や水田で育ちます。スポンジ状の茎が特徴で、吸湿・放湿性、調湿機能に優れ、日本の生活に根付いた天然素材です。
どみの（胴みの）	雨や雪が降っているときに着ていました。 両肩から背中、胴まわりを覆うような形の蓑のことです。 植物のシュロの樹皮を裂いたものを編んで作ります。 シュロとは、ヤシ科の常緑高木で、寒さに強い植物です。幹を包む繊維（シュロ皮）は耐水・耐腐食性に優れ、古くからタワシ、縄、ホウキなどの材料として利用されてきました。

洗濯用たらい	洗濯（洗い～すすぎ）をするための木製の道具です。中に水を溜め、洗濯板と合わせて使いました。
洗濯板	洗濯（洗い）をするための木製の道具です。 水が入った洗濯用たらいの中に斜めに立てかけ、石鹸をつけた洗濯物を洗濯板の溝にこすりつけて汚れを落としました。
手回し洗濯機	洗濯（洗い～すすぎ）をするための金属製の道具です。 洗濯物、洗剤、お湯を中に入れて蓋を閉め、側面についているハンドルを回して洗いました。 明治時代の終わりに欧米から輸入され、昭和初期に国内で製造が始まって広まりました。これまでの洗濯板より楽でしたが、昭和３０年ごろに電気洗濯機が登場すると、使われなくなりました。
こて	布の皺をのばすための道具です。 木の持ち手に、先が三角形になっている金属がついています。 三角形の金属部分を火鉢などに挿し込んで温めてから布に押し当て、布の皺をのばします。 これまで使われていた「ひのし」は、容器の中の炭火がはじけて布を焦がすことがありましたが、加熱式の「こて」には、その心配がありませんでした。
ひのし	布の皺をのばすための道具です。 木の持ち手に、底が平らな金属の器がついています。 金属の器に炭火を入れて熱し、器の底を布に押し当てて熱と重みで皺をのばします。 日本では平安時代から昭和初期まで使われていました。
炭火アイロン	布の皺をのばすための道具です。 木の持ち手以外は、すべて金属製です。 持ち手がついた面が開くようになっており、中に炭火を入れて使います。炭火の熱でアイロンの底が温まったら、布に押し当てて皺をのばします。

	上部にある黒い筒状のものは、炭火から出る煙を逃がす役割があります。